

日本におけるジョージ・エリオット文献書誌：明治・大正期（翻訳・書物編）

A Bibliography of George Eliot in Japan: Translations and Books in the Meiji and Taisho Eras

大 嶋 浩*
OSHIMA Hiroshi

This bibliography covers material related to George Eliot that was published in Japan—Japanese translations of her works, textbooks, and books and periodicals containing references to George Eliot—in the Meiji and Taisho eras. The entries are divided according to the different categories and the year of publication, and are presented in chronological order. The bibliography comprises the following four categories:

- I Japanese Translations of George Eliot's Works
- II Books with Any References to George Eliot
- III Annotations and Textbooks
- IV Newspapers and Periodicals with Any References to George Eliot

The first, the second and the third category appear in the present issue; the fourth category will be added in the next issues. This is not a complete bibliography of references to George Eliot in Japan. I apologize for any inadvertent omissions, and hope that further research will provide a comprehensive bibliography.

キーワード：書誌，ジョージ・エリオット，明治・大正期，翻訳と書物

Key words : bibliography, George Eliot, the Meiji and Taisho eras, translations and books

I はじめに

日本におけるジョージ・エリオットの書誌の主要なものとしては、(i) 和知誠之助の「日本におけるジョージ・エリオット」、(ii) 浅野福治の「日本におけるジョージ・エリオット——書誌つき——」、(iii) 宮崎芳三〔ほか〕編の『日本における英国小説研究書誌』、(iv) 安藤勝編の『外国文学研究要覧』および『英米文学研究要覧』がある。(ii) は、(i) を踏まえて、明治期から昭和49年(1974年)までを、(iii) は昭和43年(1968年)から昭和60年(1985年)までを、(iv) は昭和20年から平成11年(1945年1999年)までを、それぞれ調査している。

これらの書誌を概観するならば、戦後(第二次世界大戦以後)に関しては、比較的調査が進んでいると言えるが、明治・大正期を含む戦前の時期は、(ii) が調査しているとはいえ、まだ不十分なものであることを認めないわけにはいかない。

本書誌は、その不備を補うべく、現在までに筆者が調査したもののうち、明治・大正期のものをまとめたものである。本書誌は、以下の項目からなる：

- (1) 翻訳関係
 - (i) 小説・短篇
 - (ii) 子供用の版(少年少女向けに翻訳されたもの)
 - (iii) 詩
 - (iv) エッセイ
- (2) 概説書関係
 - (i) 翻訳書
 - (ii) 翻訳書以外
- (3) 注釈書・教科書関係
- (4) 新聞・雑誌関係

エリオットに関する研究書は、目下の調査によれば、昭和期にならないと見出されない。それゆえ、本書誌には研究書関係という項目は含まれていない。

各項目は年代順に整理されている。ただし、連載物等に関しては、初出を基準として一括して整理し、その細目は波線(---)で区切って明示されている。原則としてできるだけ発表当時の表記に準じ、旧字体を用いているが、一部新字体を採用したところもある。

*兵庫教育大学第2部(言語系教育講座)

掲載頁数の関係上、本稿では上記の4項目のうち、(1)～(3)までを掲載し、(4)は次号以降に掲載する予定である。

なお、本書誌の詳しい分析は、稿をあらためて論じる予定であるが、今回の調査における一番の収穫として、以下の3点を指摘しておきたい：

(i) 従来、坪内逍遙が明治18年(1885年)8月4日付けの新聞『自由燈』に寄稿した「小説を論じて書生気質の主意に及ぶ」が、日本においてエリオットへの言及が見出せる一番古い文献であると考えられてきたが¹、それよりも更に古い文献の存在が確認された。明治18年5月10日発行の『中央学術雑誌』に掲載された、逍遙の「仮作物語の變遷(接第二號)」および明治16年3月13日付けの『自由新聞』に掲載された、無記名の「稗官の所得」である。

(ii) エリオットの作品の翻訳に関しても、より古い文献が確認された。

小説の分野では、富永徳磨の『雪崩と百合』(1902.05.04)以前に、富永によって週刊紙『福音新報』(1901.06.12-1901.10.09)に18回にわたり『ロモラ』の

梗概」が連載されていることが明らかになった。また、子供用の版(少年少女向けのもの)として翻訳されたものとしては、田中久子訳による「サイラス物語」(月刊誌『新少女』(1915.04.01-1915.09.01)に6回にわたって連載)が、一番古い翻訳であることが判明した²。

詩の翻訳では、内村鑑三によって「志望」("O May I Join the Choir Invisible"の最後の数行を「精神訳」³したもの)が明治30年に発表されていること、エッセイの分野では、"German Wit: Heinrich Heine"の一節の翻訳および"Silly Novels by Lady Novelists"の大意を述べたものがそれぞれ明治の20年代、30年代に発表されていること、が確認された。

(iii) 教科書版に関して言えば、早くも明治20年に"Brother Jacob"の完全版が発行されていることが明らかになった。

まだ多くの遺漏があることと思う。本書誌をより完全なものにするために、情報等をお寄せいただければ幸いである。本書誌を作成するにあたっては、文献資料の調査・収集等において兵庫教育大学附属図書館の情報サービス係には特にお世話になった。ここに記して感謝する。

II 明治・大正期の書誌

1 翻訳関係(訳注、大意、梗概も含む)

1-1 小説・短篇作品

発行年月日	原作者名	書名、作品名等	訳者名	雑誌名、発行所、頁等	備考	
1901.06.12	明治 34 ジョルジ、 エリオット	『ロモラ』の梗概(一)(ジョルジ、エリオットの小説)	富永 蕃江生	『福音新報』第三百十一号、pp. 8-10.	『福音新報』はキリスト教週刊紙。最初、『福音週報』として1890年3月に創刊されたが、1年後に『福音新報』と改題され、以来1942年まで、半世紀に亘って発行された(『キリスト教新聞総覧』第7巻、日本図書センター、1996, p. 9.); この梗概は、改訂を施されて、『雪崩と百合』(1902.05.04)と題して民友社から刊行	
1901.06.19		『ロモラ』の梗概(二)	蕃江生	『福音新報』第三百十二号、pp. 7-9.		
1901.06.26		『ロモラ』の梗概(三)		『福音新報』第三百十三号、pp. 6-8.		
1901.07.03		『ロモラ』の梗概(四)		『福音新報』第三百十四号、pp. 6-8.		
1901.07.10		『ロモラ』の梗概(五)		『福音新報』第三百十五号、pp. 7-9.		
1901.07.17		『ロモラ』の梗概(六)		『福音新報』第三百十六号、pp. 6-9.		
1901.07.24		『ロモラ』の梗概(七)		『福音新報』第三百十七号、pp. 6-8.		
1901.07.31		『ロモラ』の梗概(八)		『福音新報』第三百十八号、pp. 8-10.		
1901.08.07		『ロモラ』の梗概(九)		『福音新報』第三百十九号、pp. 3, 4-6.		p. 3には「前號の正誤」が4行にわたって掲載されている。
1901.08.14		『ロモラ』の梗概(十)		『福音新報』第三百二十号、pp. 5-7.		
1901.08.21		『ロモラ』の梗概(十一)		『福音新報』第三百二十一号、pp. 6-8.		
1901.08.28		『ロモラ』の梗概(十二)		『福音新報』第三百二十二号、pp. 6-8.		

1901.09.04			『ロモラ』の梗概(十三)		『福音新報』第三百二十三號、pp. 9-11.	
1901.09.11			『ロモラ』の梗概(十四)		『福音新報』第三百二十四號、pp. 5-7.	
1901.09.18			『ロモラ』の梗概(十五)		『福音新報』第三百二十五號、pp. 8-10.	
1901.09.25			『ロモラ』の梗概(十六)		『福音新報』第三百二十六號、pp. 6-8.	
1901.10.02			『ロモラ』の梗概(十七)		『福音新報』第三百二十七號、pp. 10-12.	
1901.10.09			『ロモラ』の梗概(十八)		『福音新報』第三百二十八號、pp. 8-11.	
1902.05.04	明治 35	ジョルジ・エリオット	『雪崩と百合』	富永徳磨	民友社、194pp.	表紙には「エリオット著ロモラ小説雪崩と百合」とある。巻末には「雪崩と百合 終」(p.194)と記されている；巻頭に「稿者」による「雪崩と百合緒言」(pp.1-9)；『福音新報』第311号～328号（1901.06.12-1901.10.9）に掲載された『『ロモラ』の梗概』を改訂したもの
1910.04.01	明治 43	ジョルジ・エリオット	『アダム・ピキド』(「サキラス・マアナー」付)	松本雲舟	警醒社、204pp.	表紙絵、口絵1葉、挿絵5葉（そのうち「サキラス・マアナー」に関するもの1葉）；巻頭に「緒言」(pp. 1-15)、「目次」(pp. 1-4)、「アダム・ピキド」(pp. 1-181)、「サキラス・マアナー」(pp. 183-204)；「アダム・ピキド」も「サキラス・マアナー」もいずれも抄訳；表紙、「緒言」の中の一部では「アダム・ピキド」の表記、「目次」及び「緒言」では「サキラス・マアナー」の表記、本文中では「サイラス・マアナー」の表記、本文の表題では「サキラス・マアナー」の表記が、それぞれ用いられている。
1911.10.05	明治 44	デヨーヂ・エリオット	『ス井ントン氏英文學詳解』の中の「第三十九章 GEORGE ELIOT (MRS. G. H. LEWES)」における「FROM ROMOLA」	岡村愛藏 (譯注)	興文社、pp.502-27.	Romola, ch. 9 の前半途中部分からch. 11の後半途中部分までの訳注。一部、テキストの省略、変更あり。
1923.05.10	大正 12	ジョオヂ・エリオット	『サイラス・マアナ』	今泉浦治朗 (譯注)	警醒社、「序」7pp.+「はしがき」12pp.+451pp.	口絵一葉「若し私が結婚しますんでしたら、母さんの指輪を嵌めてするんですか。」；本文中に挿絵一葉「今朝は機織もおほかた中止せねばならなかった。」(p. 326とp. 327の間で、p. 327の対向頁に挿入)；巻頭に「序」(厨川白村) 7pp.、はしがき」12pp.
1923.05.15	大正 12		A Passage from the Mill on the Floss (ザ・ミル・オン・ザ・フロスの一節)	斎藤 静 譯	『英語青年』第四十九巻第四號、pp. 108-09. (巻の通しページ;号のページ付けはなし)	音標文字 (transcription) と和訳
1923.06.06	大正 12	ジョージ・エリオット	『サイラス・マアナー』	飯田敏夫	新潮社、342pp.	巻頭に訳者による「序」(pp. 1-3)；記載は第6版（1925.07.30）に基づく。
1924.04.05	大正 13	ジョオヂ・エリオット	『サイラス・マアナ』	今泉浦治朗 (譯注)	警醒社、縮刷版、「序」7pp.+「はしがき」12pp.+451pp.	1923年5月10日に出版された翻訳の縮刷版（ただし、口絵なし；他は1923年版と同一内容）；縮刷再版(1924.04.20)、縮刷三版（1924.05.01）；記載は縮刷三版に基づく。

1926.04.	大正 15		名著梗概『サイラス・マーナ』		『上級英語』(創刊号)	浅野の書誌に記載されているが、現物は未見である。
1926.05.18	大正 15	ジョージ・エリオット	サイラス・マーナー 英吉利 ジョージ・エリオット (一八一九 一八一八)	飯田敏夫氏譯に據る	宇佐見勝夫編『世界文學讀本』第三卷、東亞書院、pp. 47-66.	挿絵二枚；「世界の著名なる作家の代表的な作品を選び、この中より最も特色あり且つ優れた箇所を抜粋し、これに解題乃至補足を加えて一小編に纏め」たもの(「序言」[p.1])

1-2 子供用の版 (少年少女向けに翻訳されたもの)

発行年月日	原作者名	書名、作品名	訳者名、挿絵画家名等	雑誌名、発行所、頁等	備考
1915.04.01	大正 4	ジョージ・エリオット	田中久子(訳)	『新少女』第一巻第一號、婦人之友社、pp. 40-46.	挿絵付き、挿絵画家名は不明；「十九世紀の文豪の一人と謳はれた」英國の女流文學者ジョージ・エリオットの「傑作の一つとして評判の高い小説」サイラス・マーナーの「概略(あらまし)」を述べたもの(『新少女』第1巻第1号、p. 40)
1915.05.01				『新少女』第一巻第二號(五月號)、婦人之友社、pp. 50-56.	
1915.06.01				『新少女』第一巻第三號(六月號)、婦人之友社、pp. 47-51.	
1915.07.01				『新少女』第一巻第四號(七月號)、婦人之友社、pp. 52-58.	
1915.08.01				『新少女』第一巻第五號(八月號)、婦人之友社、pp. 36-46.	
1915.09.01				『新少女』第一巻第六號(九月號)、婦人之友社、pp. 62-68.	

1-3 詩

発行年月日	訳者名	作品名等	書名、雑誌名	発行所、頁等	備考	
1897.07.25	明治 30	内村鑑三 纂譯 「志望」(巻末の原詩 「A WISH」)	『愛吟』	警醒社、p. 75, 原詩p. 25.	第三版(1898.06.25)の記載に基づく；"O May I Join the Choir Invisible"の最後の数行を「精神訳」(「自序」, p. 1)したもの；「目次」では「志望 マリヤン、エバンス婦」、本文では「志望 マリヤン エバンス婦「ジョージ、エリオット」」、原詩では "George Elliot"と誤記；『内村鑑三信仰著作全集 5』(1962.07.12)、『内村鑑三全集 4』(1981.06.24)に収録	
1915.09.14	大正 4		『愛吟』(改版)	警醒社、p. 75, 原詩p. 25.	第16版(1920.08.05、版の番号は初版からの通し番号となっている)の記載に基づく；「自序」の前に「改版に際し此小著を左の人々に献ず」という内容が付加されている；改版では本文のルビの付け方にも変更が認められる。	
1921.12.10	大正 10	豊田 實	INTRODUCTION	Silas Marnar: The Weaver of Raveloe	研究社、研究社 英米文學叢書、 pp. i-xvii.	復刻版(1982.06.30)の記載に基づく；pp. ii-iiiに "Brother and Sister" の部分訳を掲載
1926.10.15	大正 15	内山賢次		ジョン・マーシー 著『世界文學物語』	アルス、p. 382.	「第四十四章 近代スペイン文學」の章のモットーとして、The Spanish Gypsy, Book 1の冒頭の5行が引用されている。

1-4 エッセイ

発行年月日	訳者名	作品名等	書名、雑誌名等	発行所、頁等	備考	
1889.03.09	明治 22	もみぢ	女小説家	『女學雜誌』	152号、pp. 15-16.(叢話)	"Silly Novels by Lady Novelists" の大意

1890.03.10	明治 23		ハイ子とゲエ テの交際	『學林』	第一巻六號、pp. 64-69.(文苑)；エリオット の "German Wit: Heinrich Heine" (1856) の一節が引用されている：「ジョー ジ・エリオットハ賛して曰へり、「ハイ 子は當時大英傑の一人なり其聲ハ反 響にあらずして實聲なり従ふて他の正 真なる事物とく學ふべき價を有す」 と」(p. 69)	「ハイネとゲエテの交際」の 著者はDr. Kleinと記されて いる。おそらくKleinの書い たものを翻訳したものと思 われるが、その点にはっきり しない。一応、ここでは 翻訳文献として取り扱った。
1896.01.08	明治 29	魯庵生	『蘭秀小説』を 評す(其四)	『毎日新聞』	第七千五百二十號、p. 1; "Judgments of Authors" ["Leaves from a Notebook" (1884) 所収] の冒頭の部分が引用さ れている。	
1901.11.20	明治 34	尾上柴舟	「附録 ハイ ンリッヒ、ハイ 子評傳」	譯詩集『ハイン リッヒ、ハイ 子評傳』	新聲社、pp. 1-30；「附録 ハイ ンリッヒ、ハイ子評傳」のエピ グラフとしてエリオットのエッセ イ "German Wit: Heinrich Heine" (1856) の一節を引用：「遂に、 一の反響を喚起する事なくして、 罷めりと雖も、彼の聲は、眞の 聲なり」(p. 1；前半部分は誤 訳であろう)	国会図書館所蔵本の奥付で は、発行月日は「十一月十五 日發行」が「十一月二十日發 行」に訂正されている。ここ ではその訂正に従った。
1905.02.20	明治 38			譯詩集『ハイン リッヒ、ハイ 子評傳』(増補版)	渡邊書店、pp. 1-30；「附録 ハイ ンリッヒ、ハイ子評傳」のエピ グラフとしてエリオットのエッセ イ "German Wit: Heinrich Heine" (1856) の一節を引用 (p. 1)	「附録 ハイ ンリッヒ、ハイ 子評傳」は初版(1901.11.20) と同一内容
1919.11.01	大正 8	渡辺半次 郎 譯註	Judgements of Authors (「作家 の評価」) (George Eliotの "Leaves from a Notebook" から)	『英語青年』	第四十二巻第參號、研究社、pp. 75-76. (巻の通しページ；号のページ付 けはなし)	エリオットの肖像画を一葉 掲載

2 概説書関係（参考書、文学史等；他の作家や作品に関する研究書類のなかで言及されているものも含む）

2-1 翻訳書（雑誌掲載分は「新聞・雑誌・紀要関係」の項を見よ）

発行年月日	著者名	章題等	書名	訳者名	発行所、言及頁等	備考
1911.10.05	明治 44	スキントン氏	「第三十九章 GEORGE ELIOT (MRS. G. H. LEWES)」	岡村愛蔵 (譯注)	興文社、pp. 495-527；p. 495の対向頁 (頁付けなし) にエリオットの写真1 葉掲載；「ヂョーヂ・エリオット小傳」 (p. 495)、「CHARACTERIZATION BY R. H. HUTTON.」(pp. 495-502)、 「FROM ROMOLA.」(pp. 502-27) の 三つの部分よりなる；「ヂョーヂ・エ リオット小傳」において「Maryは幼 にしてColtonの村立特殊學校（無月謝 學校）に通學し」という誤った記述あ り；記載は第五版（1913.04.27）に基 づく。	
1915.02.10	大正 4	佛國フレデリッ ク・ローリエ氏		大日本文明 協會	文明書院、pp. 516,520,565.	
1917.05.01	大正 6	ニイチエ	「二〇四 チュウ リヒ、十月廿二日、 一八八四。」	和辻哲郎	岩波書店、pp. 407-09；エリオットへ の言及はp. 409：「彼女[ヘレネ・ド ゥルスコウィツ]の最近の著書がどん なにお前の気に入るか、まあ読んで 御覽、（「三人の英國女詩人、」そ の中には彼女の非常に尊敬するエ リオットがある。それからシェレエ に關する著書。）」(pp. 408-09)	

1925.12.15	大正 14	ストップフォード・ オオガスタス・ブ ルック著、チオヂ・ サムプスン補	「百七十一、 関秀 作家」	『ブルック英文學 史——濫觴より 現代に到る——』	石井誠	東光閣書店、pp. 446-50；エリオット への言及はpp. 446-48, 450；他にp. 440 でもエリオットへの言及あり。	
1926.06.20	大正 15	ベネット		『文學趣味』	富田彬	健文社、pp. 28, 29, 178, 179.	対訳 本
1926.10.15	大正 15	ジョン・マーシー	「第三十五章 十 九世紀のイギリス 小説」	『世界文學物語』	内山賢次	アルス、pp. 387-403；エリオットへの 言及はpp. 395, 396, 398, 399；他にp. 382 では <i>The Spanish Gypsy</i> , Book 1の冒 頭部分が「第四十四章 近代スペイン 文學」の章のモットーとして引用され ている。	

2-2 翻訳書以外

発行年月日		著者名等	章題等	書名	発行所、頁等	備考（エリオットへの言及箇所 等）
1885.09.	明治 18	坪内雄蔵		『小説神髓』 (第一冊)	松月堂、(小説神髓緒言、小 説神髓目次、小説神髓上巻 一～十)	1886年5月に上・下二巻に合冊 したものが刊行され、それが普 及した。上巻は第四冊までを収 録；記載は復刻版（日本近代文 学館、1972.06.10）に基づく。
1885.09.				『小説神髓』 (第二冊)	松月堂、(小説神髓上巻 十 一～二十)	エリオットへの言及は（小説神 髓上巻 十九）
1885.09.26				『小説神髓』 (第三冊)	松月堂、(小説神髓上巻 廿 一～三十)	エリオットへの言及は（小説神 髓上巻 廿三～廿四）
1886.03.	明治 19			『小説神髓』 (第四冊)	松月堂、(小説神髓上巻 三 十一～四十)	
1886.04.				『小説神髓』 (第五冊)	松月堂、(小説神髓下巻目次、 小説神髓下巻 一～九)	
1886.04.				『小説神髓』 (第六冊)	松月堂、(小説神髓下巻 十 ～十九)	
1886.04.				『小説神髓』 (第七冊)	松月堂、(小説神髓下巻 二 十～二十九)	
1886.04.				『小説神髓』 (第八冊)	松月堂、(小説神髓下巻 三 十～三十九)	エリオットへの言及は（小説神 髓下巻 三十七）
1886.04.				『小説神髓』 (第九冊)	松月堂、(小説神髓下巻 四 十～四十八)	
1891.11.17	明治 24	澁江 保		『英國文學史 全』	博文館、pp. 215.	「ジョージ・エリオット 一八 二〇生」という誤った記載；表 紙には「澁江保著」、題扉には 「澁江保編」奥付は「著者 澁 江保」の表記
1899.05.07	明治 32	内村鑑三	「英語の美」	外国語之研究	発行所 東京獨立雜誌社、 賣捌所 警醒社、發賣所 東京獨立雜誌販賣部、pp. 41-57.	エリオットへの言及はp. 56； 『東京獨立雜誌』（1899.02.15） 掲載分の再録；『外国語之研究』 は『東京獨立雜誌』に掲載され た、外国語に関する一連の研究 等を単行本として刊行したもの； 記載は第6版（明治38年4月15日） に基づく。ただし第6版の奥付 では、「発行所 東京獨立雜誌 社、賣捌所 警醒社、發賣所 東京獨立雜誌販賣部」という記 載はなく、単に「發賣所 警醒 社書店」という記載になってい る；復刻版（南雲堂、1984.03.25） あり；『内村鑑三信仰著作全集 5』（1962.07.12）、『内村鑑三全 集 6』（1980.11.25）に収録

1889.11	明治 22	William Swinton	"XXXIX. GEORGE ELIOT (Mrs. G. H. Lewes). 1819-1880"	<i>Studies in English Literature: Being Typical Selections of British and American Authorships, from Shakespeare to the Present Time, Together with Definitions, Notes, Analyses, and Glossary as an Aid to Systematic Literary Studies for Use in High and Normal Schools, Academic Seminaries, &c., vol. 2.</i>	Sanshodo, pp. 631-46.	"GEORGE ELIOT." (pp. 631-32)、 "CHARACTERIZATION BY R. H. HUTTON." (pp. 632-35)、 "FROM ROMOLA." (pp. 635-46)の三つの部分よりなる；"GEORGE ELIOT." において "She [Mary Ann] was sent to the village free school at Colton …." (p. 631) という誤った記述あり；記載は第五版（1991.10.28）に基づく；第十六版（1908.11.05）では、出版社名は "Sansaid?" の表記
1901.06.02	明治 34	坪内雄蔵		『英文學史』	東京専門學校出版部、pp. 798-806,893,894-95,903.	「本書はもと東京専門學校文學科講義録の為に起稿せしものなるを、數々改補して再三講義録に掲げ、こたび又修正して此一巻とはなせるなり。……引用、参考の書類のうちにて、負ふところ、尤も多きは、ブルック、ダウデン、ゴッス、セインツベリ、テーヌ等の諸家也。就中、近代に關する分は、主としてセインツベリ氏の『十九世紀英國文學史』に據り、傍ら諸家の見を參酌せり。」(「緒言」[pp. 1-2])
1902.02.10	明治 35	坪内雄蔵		『英文學史』再版	東京専門學校出版部、pp. 804-12,899,900-901,909.	エリオットに関する記述は初版(1901.06.02)と同一内容
1906.05.06	明治 39	長谷川誠也		『文學訓』	博文館、p. 293.	『文學訓』はGeorge Henry Lewesの "Some Principles of Success in Literature" の抄譯；ルイスに関する解説の部分(pp. 291-95)のなかでエリオットに言及
1907.02.09	明治 40	栗原 基、藤沢周次 共編	「エリオット」	『英國文學史』	博文館、帝国百科全書、pp. 300-02；p. 314にもエリオットへの言及あり	かなり長い解説；「然るに『ロモラ』以外の者は多くは經營慘憺の作にして哲學的傾向のために著しく餘韻を失ふに至れり。特に一種の偏狹なる道德主義を目的として強いて感情を壓迫せしを以て、最も不自然なる者となれり。かゝる過失は全く女性作家たる者が天性に反して男性的特徴を發揮せんと試みたる為なるべし。女子が自ら小説家の本領となせし所は人生の研究にありき。……此偏理的的心理小説は常に當代の崇高な悲哀、暗黒の方面を寫したる紀念として長く後人に傳はるべし。」(pp. 301-02)
1907.02.28	明治 40	淺野和三郎	「第十篇 ヴィクトリア朝（七）小説界の三閨秀」の中の「エリオット」	『英文學史』	大日本圖書株式會社、pp. 811-19, 820-21.	記載は第三版（1908.08.25）に基づく。

1907.05.07	明治 40	夏目金之助		『文學論』	大倉書房、pp. 268-69, 408-09, 647.	「EliotがTinaを寫すに用ゐたる對置に至っては天下の名文なり。」(p. 408)；記載は復刻版(名著復刻全集編集委員会編『文學論』[日本近代文学館、1975.11.15])による
1908.11.18	明治 41	戸川秋骨	「エリオット」	『英文学講話』	東亞堂書房、pp. 136-38.	「ブロンテ」(pp. 135-36)の項の末尾(p. 136)においてもエリオットへの言及あり。
1909.03.16	明治 42	夏目金之助		『文學評論』	春陽堂、p. 310.	「第四編 スキフトと厭世文學」の中でエリオットに言及；記載は復刻版(名著復刻全集編集委員会編『文學評論』[日本近代文学館、1975.11.15])に基づく。
1912.05.28	明治 45	菊池大麗	「五四、菊池總長」	京都帝國大学以文會編纂、『靜修書目答問』	博文館、pp. 96-102.	エリオットへの言及はpp. 101-02;奥付には「著者 京都帝國大学以文會専務幹事 山本良吉」とある；『ロモラ』を推奨
1915.05.12	大正 4	戸川秋骨	「英文學史の選択」、「政治家の文學」の中の「II. John Morley」、「イギリスの雑誌」、「イギリス小説二十五種」	『英文學精講』	東亞同書房、pp. 1-6, 113-20, 293-99, 299-300.	エリオットへの言及はpp. 3, 117, 294, 296, 300.
1921.08.18	大正 10	生田長江、野上白川、昇 曙夢、森田草平共著	「第十一講 英米近代文學」の中の「(四) 寫實主義乃至自然主義的傾向」	『近代文藝二十講』	新潮社、pp. 395-98.	エリオットへの言及はp. 396;他に巻末の「近代文學年表」(pp. 2,6)においてもエリオットに言及
1924.01.15	大正 13	平田禿木	「ジョージ・エリオット」	『英文學印象記』	アルス、pp. 146-57.	末尾に(1919,12)の記載；「英小説發達の徑路」(pp. 158-70;末尾に[1916,6]の記載)のp. 170においてもエリオットへの言及あり;記載は6版(1924.02.05)にに基づく。
1924.11.15	大正 13	日高只一		『英米文藝印象記』	新潮社、p. 78.	
1925.01.20	大正 14	木村毅	「第九講 背景の進化とその哲學的意義」の中の「(一七) エリオットの現實的背景」	『小説研究十六講』	新潮社、pp. 279-80;他にpp. 49-50, 101, 112, 125-26, 134, 135-36, 138, 139, 140, 146, 151-52, 157-58, 164-65, 179-80, 202, 206, 210, 218, 218-19, 231-34, 274, 276, 280-81, 300, 310, 311, 344, 400, 458, 470-71でもエリオットに言及	『アダム・ビード』、『フロス河畔の水車小屋』、『サイラス・マーナー』、『ロモラ』、『ミドルマーチ』、『ダニエル・デロンダ』に言及；特にpp. 231-34では『フロス河畔の水車小屋』第5章の比較的長い一節の引用とその分析がなされている；p. 218の「エリオットの描いたテレンス・マルヴァニイ」とは「ティト・メレマ」(Tito Melema)の間違いであろう。
1924.11.05	大正 13	小日向定次郎		『英文學史：ドライデン時代よりヴィクトリア王朝初期迄』	文献書院、pp. 143, 525.	
1925.10.20	大正 14	木村毅		『世界文學の輪郭』	新潮社、文藝入門叢書第一編、p. 200.	
1926.07.15	大正 15	戸川秋骨	「英文學印象記を読んで：平田禿木君に無駄話を送る」	『英文學覺帳』	大岡山書店、pp. 257-71.	エリオットへの言及はp. 263.

3 注釈・教科書類（雑誌掲載分を含む）

発行年月日		注釈者・編者	書名、作品名	雑誌名	発行所、頁等	備考
1887.09.15	明治 20	吉岡哲太郎 編纂兼出板 ^[ママ] 人	<i>Brother Jacob</i>		吉岡商店、36pp.	"The Student Series of Fiction"の一つ。 <i>Brother Jacob</i> のテキストの全文を収録した完全版。テキストのみで注なし。「一冊定價金十銭」。記載は国会図書館蔵のマイクロフィッシュに基づく。
1910.10.01	明治 43	熊本謙二郎 講義	ジョージ・エリオット短篇小説 ブラザー・ヂエイクopp講義〔第一回〕	英語青年	第貳拾四卷第壹號、pp. 6-7.	
1910.10.15	BROTHER JACOB. ^[ママ] 〔第二回〕		第貳拾四卷第貳號、p. 32.			
1910.11.01	BROTHER JACOB. ^[ママ] 〔第三回〕		第貳拾四卷第參號、p. 61.			
1910.11.15	BROTHER JACOB〔第四回〕		第貳拾四卷第四號、p. 86.			
1910.12.01	BROTHER JACOB〔第五回〕		第貳拾四卷第五號、p. 109.			
1911.01.01	明治 44		BROTHER JACOB〔第六回〕		第貳拾四卷第七號、pp. 162-63.	
1911.01.15			BROTHER JACOB〔第七回〕		第貳拾四卷第八號、p. 185.	
1913.02.	大正 2	H. Watanabe (渡辺半次郎)	<i>Silas Marner: The Weaver of Raveloe</i>	英語教授	Vol. VI, No. 2, pp. 46-49.	『英語教授』は「日本における最初の英語教育の専門雑誌」で、「Silas Marnerの詳しい注釈」は「同誌の呼びものの一つとなった」（『英語教授（復刻版）別巻・解説編』[名著普及会、1985]、pp. iii, 1, 139)
1913.04.	<i>Silas Marner: The Weaver of Raveloe (II)</i>		Vol. VI, No. 3, pp. 43-46.			
1913.06.	<i>Silas Marner: The Weaver of Raveloe (III)</i>		Vol. VI, No. 4, pp. 49-50.			
1913.10.	<i>Silas Marner: The Weaver of Raveloe (IV)</i>		Vol. VI, No. 5, pp. 47-51.			
1913.12.	<i>Silas Marner: The Weaver of Raveloe (V)</i>		Vol. VII, No. 1, pp. 31-35.			
1914.02.	大正 3		<i>Silas Marner: The Weaver of Raveloe (VI)</i>		Vol. VII, No. 2, pp. 42-46.	
1914.04.			<i>Silas Marner: The Weaver of Raveloe (VII)</i>		Vol. VII, No. 3, pp. 34-36.	
1915.10.	大正 4		<i>Silas Marner: The Weaver of Raveloe (VIII)</i>		Vol. VIII, No. 5, pp. 44-47.	
1921.12.10	大正 10	豊田 實	<i>Silas Marner: The Weaver of Raveloe</i>		研究社、研究社英米文學叢書	完全版；記載は復刻版(1982.06.30)に基づく。
1924.02.15	大正 13	市河三喜	<i>Silas Marner</i> (『サイラス・マーナ』)		研究社	完全版；記載は第10版(1928.02.05)に基づく。

注

- 1 浅野 162. なお、浅野の書誌は、逍遙が明治18年(1885年)8月4日の『自由燈』に寄稿した論説を「小説論一斑——小説の主眼」と記しているが、「小説を論じて書生氣質の主意に及ぶ」の間違いである。
- 2 『『ロモラ』の梗概』と「サイラス物語」は、「日本ジョージ・エリオット協会 第六回全国大会」(2002年11月30日、於 帝塚山大学)における岸本京子氏の研究発表資料「George Eliotの作品中、日本における既刊翻訳リスト(註釈・童話も含む)」(研究発表タイトル「ジョージ・エリオットが日本で辿った道:女性作家として」)のなかでも触れられている。
- 3 内村鑑三、「自序」、『愛吟』(警醒社、1897) 1.

引用・主要参考文献

- 浅野福治、「日本におけるジョージ・エリオット——書誌つき——」、『学苑』424(1975): 162-79.
- 安藤勝編、『外国文学研究文献要覧 I <英米文学>篇(1965-1974)』。日外アソシエーツ、1977.
- 安藤勝編、『英米文学研究文献要覧(1975-1984)』。日外アソシエーツ、1987.
- 安藤勝編、『英米文学研究文献要覧(1985-1989)』。日外アソシエーツ、1991.
- 安藤勝編、『英米文学研究文献要覧(1945-1964)』。日外アソシエーツ、1994.
- 安藤勝編、『英米文学研究文献要覧(1990-1994)』。日外アソシエーツ、1996.
- 安藤勝編、『英米文学研究文献要覧(1995-1999)』。日外アソシエーツ、2001.
- 榎本隆司編、「民友社文學年表」、『民友社文學集』明治文學全集36. 筑摩書房、1970.
- 岡野他家夫、『明治文学研究文献要覧』。1944; 富山房、1976.
- 岸本京子、「George Eliotの作品中、日本における既刊翻訳リスト(註釈・童話も含む)」。「日本ジョージ・エリオット協会 第六回全国大会」(2002年11月30日、於 帝塚山大学)の研究発表資料(研究発表タイトルは「ジョージ・エリオットが日本で辿った道:女性作家として」)。
- 木村毅・斎藤昌三、『西洋文学翻譯年表』。岩波講座世界文学。岩波書店、1933.
- 近代文学研究会代表 人見圓吉、「岩野泡鳴」、『近代文学研究叢書 第十九巻』。昭和女子大学、1962. 217-364.
- 『国際子ども図書館開館記念 子どもの本・翻訳の歩み 展展示会目録』。国立国会図書館、2000.
- 国立国会図書館整理部編、『国立国会図書館所蔵 明治期刊行図書目録 第4巻』。国立国会図書館、1974.
- 国立国会図書館整理部編、『国立国会図書館所蔵 明治期刊行図書目録 第5巻』。国立国会図書館、1974.
- 国立国会図書館編、『明治・大正・昭和 翻訳文学目録』。風間書房、1959.
- 佐藤輝夫編、『近代日本における西洋文学紹介文献書目・雑誌篇(1885-1898)』。悠久出版、1970.
- 昭和女子大学近代文学研究室、「夏目漱石」、『近代文学研究叢書 第17巻』。昭和女子大学近代文化研究所、1961. 17-215.
- 昭和女子大学近代文学研究室、「内田魯庵」、『近代文学研究叢書 第三十一巻』。訂正版。昭和女子大学近代文化研究所、1970. 17-125.
- 昭和女子大学近代文学研究室、「森 鷗外」、『近代文学研究叢書 第二十巻』。昭和女子大学近代文化研究所、1963. 109-427.
- 田熊渭津子編、「明治翻譯文學年表」、『明治翻譯文學集』明治文學全集7. 筑摩書房、1972.
- 宮崎芳三〔ほか〕編、『日本における英国小説研究書誌 昭和43-昭和47』。1974; 風間書房、1980.
- 宮崎芳三〔ほか〕編、『日本における英国小説研究書誌 昭和48-昭和52』。1980; 風間書房、1985.
- 宮崎芳三〔ほか〕編、『日本における英国小説研究書誌 昭和53-昭和56』。風間書房、1985.
- 宮崎芳三〔ほか〕編、『日本における英国小説研究書誌 昭和57-昭和60』。風間書房、1987.
- 柳田泉、『西洋文学の移入』。春秋社、1974.
- 吉井好隆、『明治・大正の翻訳史』。研究社、1959.
- 和知誠之助、「日本におけるジョージ・エリオット」、『甲南女子大学研究紀要』2(1965): 91-102.